

ビワ生育情報

千葉県
平成21年3月号

平成21年2月の気象

平成21年2月の半旬別の気象は表1に示した。平均気温は第6半旬を除く全ての半旬で平年を上回り、中でも第3半旬は平年より4.6℃高かった。月平均気温は7.7℃で、平年より1.4℃、前年より3.0℃高かった。

氷点下日数は第4及び第5半旬でみられた。月合計は3日で、平年より6日、前年15日少なかった。

最低極温は全ての半旬で平年と同じか上回った。2月22日には-0.5℃を記録し、2月で最も寒かった。

降水量は第4及び第6半旬を除く全ての半旬で平年を下回り、第1及び第2半旬は降雨がなかった。月合計は66mmで平年の73%、前年の99%であった。

日照時間は第2半旬を除く全ての半旬で平年を下回った。月合計は126時間で、平年の83%、前年の62%であった。

表1 平成21年2月の気象（暖地園芸研究所）

半旬	気温(℃)			氷点下日数(日)			最低極温(℃)		
	本年	平年	前年	本年	平年	前年	本年	平年	前年
1	7.1	5.1	3.4	0	2.1	4	1.7	-1.7	-2.3
2	6.9	6.2	3.8	0	1.9	2	0.7	-1.5	-2.2
3	11.2	6.6	4.1	0	1.8	4	1.2	-1.5	-3.3
4	7.2	6.1	3.8	2	1.5	5	-0.3	-1.1	-2.5
5	7.4	6.8	6.8	1	1.2	0	-0.5	-0.5	0.0
6	5.9	7.2	6.8	0	0.9	3	2.9	0.1	-1.9
平均/計/最低値	7.7	6.3	4.7	3	9.4	18	-0.5	-3.3*	-3.3

※：2月の過去35年間の最低極温の平均

半旬	降水量(mm)			日照時間(時間)		
	本年	平年	前年	本年	平年	前年
1	0	12	41	25	29	30
2	0	13	6	33	28	28
3	5	9	11	24	27	33
4	29	26	0	24	26	40
5	16	19	0	17	26	50
6	17	11	9	3	16	22
合計	66	91	67	126	151	203

4月の作業（果実の発育は次ページ）

4月になると平均気温が一段と高くなって枝葉・根ともに伸長が盛んな時期になり、果実の肥大も急速に進む。前月に続き、摘果・袋掛けが重要な作業になり、今月中には終わりたい。

摘果・袋掛け

寒害が見られる園では、生死の判別がしやすくなった頃から摘果を始める。果形が細長く、果皮に張りがないものは寒害果の可能性が高い。外観と被害果の関係を見極めてから効率よく摘果作業を進める。

がんしゅ病の予防

袋掛けが終了した後、収穫が始まるまでに防除指針に従って銅剤を予防散布する。幹や枝に薬液が充分にかかるようにする。

除 草

春草が繁茂する時期になるので、収穫が始まる前に除草をすませる。草生栽培園では、有機物を補給する意味で草を刈り取って樹冠の回りに敷くとよいが、労力の足りない場合は除草剤を利用する。

花房及び果実の発育

ビワの開花期は表2に示した。暖地園研の開花始期は、3品種ともに平年より2～8日、前年より2～5日早かった。開花盛期は、3品種ともに平年より7～14日、前年より7～8日早かった。

開花終期は「楠」が12月12日、「大房」が2月17日、「田中」が1月26日であった。「楠」は平年より21日、前年より5日早かったが、「大房」及び「田中」は平年よりそれぞれ18、10日、前年よりそれぞれ5、17日遅かった。

本年の開花の進みは、いずれの品種も開花盛期まで平年より早かったが、年末から1月中旬までの気温が平年より低かったため、開花終期は「楠」を除き、平年より遅れた。

表2 ビワの開花期（暖地園芸研究所）

品 種	開花始期(月.日)			開 花 盛 期			開 花 終 期		
	本年	平年	前年	本年	平年	前年	本年	平年	前年
楠	11. 5	11.10	11. 7	11.16	11.30	11.24	12.12	1. 2	12.17
大 房	11.23	11.25	11.25	12.15	12.22	12.23	2.17	1.30	2.12
田 中	11. 6	11.14	11.11	11.27	12. 9	12. 4	1.26	1.16	1. 9

平年：1982年～2007年の26年間の平均

2月27日時点で寒害の被害をまぬがれたビワ幼果の生存率は表3に示した。樹冠外側の生存率は「楠」が93%、「大房」が99%、「田中」が95%であった。いずれの品種も平年及び前年より高かった。樹冠内側の生存率は「楠」及び「田中」がそれぞれ100%、「大房」が99%であった。いずれの品種も平年及び前年と同じか高かった。樹内外の平均生存率は「楠」が96%、「大房」が99%、「田中」が97%であった。いずれの品種も平年及び前年より高かった。

暖地園研では2月28日までに最低極温の-3℃以下の日が一度もなかったが、本年は開花の進みが平年よりやや早く、発育の進んだ幼果が多いため、寒害の被害がややみられた。

果房は充実していて樹の生育も順調である。本年の果樹カメムシ類の越冬量は、南房総市他県南地域で平年並であるが、今後の発生予察情報を参考にする。また、カメムシの発生の多い園では、4月以降ビワ園への飛来に注意を要する。

表3 ビワ幼果の生存率（暖地園芸研究所）

品 種	樹冠の外側(%)			樹冠の内側			平 均		
	本年	平年	前年	本年	平年	前年	本年	平年	前年
楠	93	57	47	100	92	100	96	74	69
大 房	99	82	70	99	94	98	99	87	82
田 中	95	82	71	100	97	98	97	89	83

調査：2月末日

平年：1998年～2008年の11年間の平均

【生育情報の問合せ先：千葉県農林総合研究センター 暖地園芸研究所 果樹研究室 電話0470-22-2961】

※果樹の生育情報は「ちばの農林水産業」の「生産技術に関する情報」でもご覧いただけます。

<http://www.pref.chiba.lg.jp/nourinsui/>